常勝のワンチームを作る８つのステップ vol.27

力が湧き上がる体験をする「場」の重要性

文 林 敏之
text by Toshiyuki Hayashi

自分しか感じることのできない意味や価値に出会うためには、感性を常に自由にさせておく必要があります。つまり、何かをするときには、英語でいえば「want to（～したい）」で動くということです。「want to」が「have to（～しなければならない）」になり、「やらされている」と感じれば、感性に響くこともなく、出会いもありません。もちろん「have to」でやっているうちに面白さに気づき「want to」になることもあるでしょうが。

いずれにせよ、感性を言葉で定義しようとすると、その時点で感性ではなくなってしまいます。もともと感性とは自由なもの。そして自由とは、自由自在、すなわち自らに由（よ）って自らが在ることであり、泣きたいときに泣くことができ、笑いたいときに笑うことができる状態なのです。

このように、感性は素直です。理性が強すぎると周りの目を気にしたりしますが、理性で感性を歪めてはいけない、ということでしょう。

他人から見て「よく頑張っているなあ」と思うようなことでも、その人にしてみたら「好きでやっていることだから」と、苦労している実感がないことは、よくあります。これが「want to」で動くということです。

いまは自分の感性から力が湧き上がる体験がしにくい時代です。特に子どもを取り巻く環境は深刻。社会全体が、子どもが傷つかないように傷つかないようにと、過保護になっています。そして親は、「あれをしなさい」「これをしなさい」と先回りして、子どもをコントロールしようとします。

これでは「have to」で動くことが当たり前になり、「指示待ち人間」の大人にしかなりません。失敗してもいいので「want to」で何かの中に飛び込み、そこにどっぷりと「浸りきる」── こうして初めて、湧き上がるものと出会うことが叶うのです。

そのために必要なものが「場」です。高校ラグビーでいえば、「花園ラグビー場」という全国大会の場があるからこそ、ラガーマンは皆、そこに思いを馳せる。その「場」に参加するため、仲間と共に涙を流し、日々の苦しい鍛錬を積み、そのなかで感性から湧き上がるものが生まれるのです。

これは、ラグビーに限ったことではありません。野球でいえば、その「場」は「甲子園球場」であり、音楽ならば登竜門といわれるようなコンクールがそれに当たります。

Profile

1960年徳島生まれ。13歳よりラグビーを始める。日本代表を13年間務め、神戸製鋼では7連覇を達成。同志社、神戸製鋼、日本代表、第1回RWCではキャプテンを務めた。オックスフォードブルー、歴代ベスト15に入る。引退後はラグビーで体験した湧き上がる感動を伝えようと、教育の道を志し、感性教育をテーマに活動している。2006年にNPO法人ヒーローズ設立、理事長就任。

『常勝のワンチームを作る
８つのステップ』
林敏之
発行：白秋社
定価：1870円（税込）